

三世代同居意識と家規範意識に関する研究

－世代と家族形態からの検討－

水 上 喜美子・赤 澤 淳 子・小 林 大 祐

超高齢社会である現在は、高齢者である老親世代が子世代や孫世代とどのような家族関係を構築すべきなのかが模索されている時期でもある。このことに関して本研究は、孫世代となる学生や子世代である母親がどのような三世代同居意識や家規範意識をもっているのかについて検討することを目的におこなった。

三世代同居という家族形態に対する意識を測定するために三世代同居意識尺度を作成して、因子分析をおこなったところ同居肯定意識と同居否定意識と命名できる二つの因子が存在していることが認められた。また、世代や家族形態によって三世代同居意識や家規範意識に差異が認められるのかについて検討した結果では、子世代よりも孫世代の方が、核家族よりも三世代家族の方が三世代同居に対して肯定的な意識を示し、家規範意識も希薄化していないことが認められた。また、核家族という形態では、孫世代より子世代である母親が三世代同居に対して肯定的でなく、人間関係の複雑さや役割を回避したり伝統的な家規範意識にはとらわれたくないといった意識もあることも認められた。さらに、家族形態と親子の家規範意識の相違によってこの三世代同居意識に差異が認められるかを検討した結果では、孫世代の三世代同居意識には家族形態や家規範意識の相違によって差異が認められたが、子世代の三世代同居意識には家族形態による差異のみが認められた。このことから、三世代同居意識には家族形態のあり方や親子の家規範意識の一致度によって差異があると考えられる。

キーワード：三世代同居意識，家規範意識，世代，家族形態

問 題

戦後の家制度の廃止により、家父長的な家族制度を基盤とする多世代家族が減少して、核家族が増加することになった。高橋（1989）は、戦前の家族制度には家族連続性と家族不平等性という二つの側面を有していたと指摘している。前者は長男家族が老父母（以下、老親と省略する）と同居することによって自らの世帯を形成しながら「家」を世代から世代へと継続的に継承することであり、後者は家族構成員の年齢や性別による不平等さという上下や優劣の序列を明確にした価値観のことである。しかしながら、戦後の家族形態の変化によってこの二つの側面も変化して、家族の各構成員の個人化と家族構成員間のつながりの希薄化をもたらした（岡堂，2000）という指摘もある。

家族形態については、平成21年度の「高齢社会白書」によれば、65歳以上の高齢者のいる世帯は全世界帯の40.1%であった。この高齢者世帯の内訳は、三世代世帯18.3%、夫婦のみ世帯29.8%、単独世帯22.5%、親と未婚の子のみ世帯17.7%という値であり、このことは、高齢者のいる世帯数は多いが、子どもと同居する高齢者が減少していることを示している。その後2025年には、夫婦のみ世帯と単独世帯の割合は70.0%になり、高齢夫婦のみ家族や高齢者の一人暮らしがこれまで以上に増加することが予測されている。このような「超高齢化社会」への移行は、高齢者に老後の日常生活の維持や心身機能低下などによる不安を生起させることになり、また長寿化の影響によって配偶者の介護や高齢の子どもによる介護などといった問題がさらに増加することも考えられる。

ここで、内閣府がおこなった「高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査」(2005)では、2001年と2005年の4年の間では以下のような変化が示されている。将来子どもとの同居意識を示す人は47.7%から41.1%に減少し、別居意識を示す人は17.8%から20.4%に増加している。また、毎日新聞社人口問題調査会が1950年から実施している「全国家族計画世論調査」によると、「老後の暮らしを子どもに頼るつもり」と子どもに期待する人の割合は1950年の調査では59.1%であったが、2000年の調査では10.8%と5割近く減少し、「子どもに頼らないつもり」という回答をした人の割合が増加している。このことに関して柚井(2009)は、「子どもに頼らないつもり」という回答には、年金制度の成熟化などによる経済力の上昇だけでなく、時代が変わったのだから頼るべきではないという諦めや自制心が潜んでおり、老後の生活は自らの手で築くという気持ちにさせている、としている。

また、2005年の「全国家族計画世論調査」では、既婚となった子世代に老親の面倒を見ることに関する考え方を尋ねたところ、「子どもとしての義務」と回答した人は1986年には56.5%であったが、2000年には30.9%とほぼ半減し、「よい習慣だと思う」と回答した人は16.9%から14.3%と減少していた。さらに、この孫世代にあたる大学生の親との同・別居意識について、松村・張・勝野・山瀬・山本(1992)は、親との同居を希望した人は2割で、親孝行のために同居すべきという伝統的価値観を示しているが、実際に同居するか否かについては実利や功利に基づく個人主義的同居観および妻の就労や自由な生活などからの影響があり、さらに親子間における平等の役割分担の保証といった要因からの影響も認められる、としている。

これらのことより、家族構成員の個人化が進むにつれ、老年期における子どもとの同居志向は低下し、子どもに経済的な負担をかけたくないとか、子どもには頼りたくないという人が増加して、老親が自分たちに対する扶養といった子どもへの責務を期待しなくなってきたことが考えられる。そして、その子どもや孫も、年老いた親や祖父母の面倒を見るのが当然だという意識が希薄化してきていることも考えられる。

また、若者の高齢者に対する態度である高齢者意識

の形成に関しては、祖父母との関わり方の質(水上・岩淵, 2006, 2007)に加えて、母親の高齢者意識も重要な要因の一つであることが認められている(水上・岩淵, 2008)。母親が高齢者に対して肯定的意識をもっている場合、その子どもは肯定的な意識をもちやすく、逆に母親が否定的な意識の場合には子どもは否定的な意識をもちやすいという結果であった。このことは、老親扶養の意識なども家庭内での世代から世代に継承される可能性があることを示しており、この意識に関しては家族形態のあり方からの影響も存在すると考えられる。

ここで、国立社会保障・人口問題研究所(2009)の「日本の世帯数の将来推計」によれば、高齢者が子どもと同居する三世代同居家族は、2005年には12.7%で、2030年においても11.2%存在し、その値はそれほど変化しないことが推定されている。平野(2009)は、日本の家族形態は核家族化と三世代家族の残存という二つの位相の併存という形で進行してきており、三世代家族は今後も12%前後で持続的に形成されていくとしている。このことに関して、直井(1993)は、日本で核家族化が完全に達成されない理由として、老後に子どもと同居するという家族規範が残り、夫婦を中心とした構造ではなく母子中心の家族構造をもち、家の継承という意識が残っている点を指摘している。また、鈴木(1986)は、核家族の長所や短所が明らかになるにつれ、三世代家族の長所や短所が見直され、短所を克服し長所を伸ばす形で新しい三世代家族が作られると指摘している。この理由については、三世代家族が一つの家族というよりは、老親夫婦と子ども夫婦の二つの核家族の複合体であるという意識(これを「核家族境界の存在」としている)が明確になるからであると説明している。

このような三世代家族への意識の変化は、居住形態や高齢者の役割意識にも変化をもたらした。1975年に旭化成が二世帯住宅を販売し、これ以降に二世帯住居という住まいの概念も日本の住文化として浸透してきている。二世帯住宅研究所(2009)によるヘーベルハウスの入居者981名を対象とした「親子同居スタイル・多様化の実態調査」では、片親との同居が43%と多く、同居する人数も4人以下と少人数であり、親世帯

が50代という若い世代では49%が娘夫婦と同居していることが示された。また役割意識についても、水上(2008)が日常生活における高齢者の役割について検討したところ、高齢者は世話役的、家父長的、継承的という三つの役割を遂行していることが認められた。ここでは、高齢期になっても継承的役割は存在するが、世話役的や家父長的な役割は存在しにくくなることが認められた。

これらのことから、現代社会における三世代家族のあり方や意識は大きく変化し、また高齢者の家族内における役割や立場も変化してきていることが考えられる。このように現在は、老親世代と子世代に加えて孫世代とどのような家族関係を構築すべきなのかということが模索されている時期でもあると考えられる。

以上のことから、高齢者である老親世代が子世代や孫世代とどのような家族関係を構築すべきなのかを検討していくためには、孫世代にあたる学生や子世代である親が、この三世代家族に対してどのような意識を持っているのか、また親孝行や老親扶養など家に関する規範を示す家規範意識はどのようになっているのかについても検討する必要があると考えられる。

このために、本研究では、まず、学生と母親の三世代同居に対する意識の尺度化をおこなって三世代同居意識尺度を作成する。次に、世代や家族形態によって三世代同居意識や家規範意識に差異がみられるのかについて検討する。さらに、家族形態と親子の家規範意識の相違によってこの三世代同居意識に差異が認められるのかについても検討していくことにする。

方 法

1. **調査対象者**：調査は、大学と専門学校に通う学生およびその母親を対象者として実施した。質問紙は372組に配布し、学生からは372部、母親からは189部を回収できた。分析には、家族形態や性別、年齢などの項目に記入漏れのない学生と母親の合計551部のデータを用いた。

対象者である学生の平均年齢は19.79±1.11歳(年齢範囲18~24歳)、男性124名(19.90±1.22歳)、女性239名(19.74±1.22歳)であった。母親(年代のみ回

表1 世代と家族形態別の人数

		核家族	三世代家族	その他	合 計
学生	全体	153 (42.1)	191 (52.5)	19 (5.2)	363 (100.0)
	男性	56 (15.4)	59 (16.3)	9 (2.5)	124 (34.2)
	女性	97 (26.7)	132 (36.4)	10 (2.8)	239 (65.8)
母親		84 (44.7)	97 (51.6)	7 (3.7)	188 (100.0)

()内は比率

答)188名の年代は、40歳代123名(65.4%)、50歳代62名(33.0%)、60歳代2名(1.6%)であった(表1参照)。一人暮らしの学生の場合には、高校を卒業するまでの家族形態についての回答を求めた。

学生および母親と共に回収できた数は166組(回収率50.9%)で、回答者IDからマッチングしたデータで分析が可能な有効ペア数は148組であった。学生の平均年齢は、20.09±1.08(年齢範囲18~24歳)で、男性31名(20.52±1.23歳)、女性117名(19.97±1.01歳)であった。母親の年代は、40歳代95名(64.2%)、50歳代51名(34.5%)、60歳代2名(1.4%)であった。

2. **調査時期**：調査時期は、2008年1月から3月の2ヵ月間であった。

3. **質問紙の構成**：三世代同居に対する意識を測定するための項目は、旭化成ホームズ株式会社二世帯住宅研究所が実施した調査報告「二世帯同居・この10年」(2005)を参考に作成し、これを三世代同居意識尺度とした。同居生活の期待と実感に関する質問項目から、老親世帯と子世帯が期待すると回答した上位8項目を選択した。また、同居生活の不安と不満に関する項目は、老親世帯と子世帯が不安と不満に感じると回答した上位7項目で構成した計15項目の尺度とした。

三世代家族の対象者には、各項目について「どの程度感じるがありますか」という教示を与え、核家族の対象者には「三世代同居に対するイメージとしてあてはまるものはどれですか」という教示を与え、「そう思わない(1点)」から「そう思う(5点)」の5件法により回答を求めた。

家規範意識は、直井(2001)が親孝行規範を測定するために作成した家規範尺度を用いた。この尺度は、「先祖を供養することは子孫の義務」や「最終的な決定は家長がすべき」また「長男またはあととりは多く

相続]、「老後は子や孫と暮らす」、「子どもの結婚は親の意見を尊重すべき」の5項目からなり、「そう思わない(1点)」から「そう思う(5点)」の5件法により回答を求めた。家規範意識尺度の得点が高ければ、個人を超えた先祖からの跡継ぎ制や家父長の権限性などといった家規範意識が高いことを示している。

さらに暦年齢、性別、家族構成、祖父母との同居経験などの基本属性の項目への回答を求めた。この他に、高齢者意識尺度(岩淵・水上, 2004)、自尊感情尺度(山本・松井・山成, 1982)などについても測定したが、分析対象としては用いなかった。

4. 調査の実施: 質問紙は無記名方式で母親への質問紙と共に授業中に配布し、学生が母親と同居の場合は翌週の授業中に回収し、学生が一人暮らしの場合には郵送で回収した。回収時には回収用封筒も配布して、学生には母親への質問紙やその回答を確認できないようにした。

た、第II因子は三世同居に対して不安や不満などを表す「同居否定意識」因子で、 α 係数は.80であった。ここで、この尺度全体での α 係数は.70ではあるが、ほぼ内的妥当性があると考えられる(表2参照)。

2. 世代と家族形態による三世同居意識の差異

世代(学生・母親)と家族形態(核家族・三世家族)によって三世同居意識とこの下位因子である同居肯定意識因子と同居否定意識因子に差異が認められるのかについて分散分析を用いて検討した(表3参照)。

この結果、三世同居意識全体においては、世代($F_{(1,470)}=8.77, p<.01$)および家族形態($F_{(1,470)}=13.09, p<.01$)の主効果は認められたが、交互作用は認められなかった($F_{(1,470)}=0.29, n.s.$)。ここで、同居肯定意識因子では、世代($F_{(1,470)}=0.36, n.s.$)と家族形態の主効果($F_{(1,470)}=0.33, n.s.$)、および交互

表2 三世同居意識尺度の因子分析の結果

	因子 I	II	共通性
10. 家族的な雰囲気や団らんを楽しめる	.696	-.298	.574
12. 自分や家族の急病の時など心強い	.694	.063	.486
14. 子どもの精神的な成長に役立つ	.644	-.097	.424
15. 安心して旅行や外出ができる	.609	.014	.371
5. 家事に協力してもらえる	.608	.020	.370
2. 子どもの世話をしてもらえる	.575	.039	.332
11. 冠婚葬祭などの対応がわかる	.567	.090	.330
8. 快適な住まいや環境が得られる	.478	-.259	.296
7. 生活全般に対する価値観が違う	-.182	.694	.516
4. 世帯間のプライバシーが確保できない	-.072	.682	.471
9. 日常的な気づかひが増える	-.057	.680	.466
13. 生活の干渉を受けやすい	.048	.663	.442
6. 自分が夜遅く帰りにくくなる	-.042	.553	.308
3. 生活時間やリズムが違う	-.043	.528	.281
1. 友人や自分の親戚との交流に気がつかう	.100	.421	.187
因子寄与	3.40	2.45	
累積寄与率(%)	22.69	39.02	

結 果

1. 三世同居意識尺度の作成

学生や母親が、三世同居という家族形態に対してどのような意識をもっているのかを検討するために、三世同居意識の15項目について最尤法による因子分析をおこなった。ここでは、因子間の相関がないことを前提にバリマックス回転を用いた。

因子を構成する項目の設定基準を固有値1.0以上で因子負荷量.40以上とした結果、2因子が抽出された。第I因子は、三世同居に対する好意や期待などを表す「同居肯定意識」因子で、 α 係数は.82であった。ま

表3 世代と家族形態別の三世同居意識と家規範意識

三世同居意識全体		学生(n=312)	母親(n=162)	全体(n=474)
家族形態	核家族(n=196)	50.07(7.03)	47.54(7.41)	49.44(7.29)
	三世家族(n=278)	53.48(9.76)	51.03(8.77)	52.39(9.48)
	全体(n=474)	52.02(8.83)	49.54(8.38)	51.17(8.75)
同居肯定意識因子				
家族形態	核家族(n=196)	34.31(6.95)	34.33(5.90)	34.15(5.56)
	三世家族(n=278)	34.41(6.95)	34.77(6.07)	34.47(6.66)
	全体(n=474)	34.21(6.35)	34.59(5.98)	34.34(6.22)
同居否定意識因子				
家族形態	核家族(n=196)	16.42(5.68)	13.20(4.42)	15.29(5.03)
	三世家族(n=278)	18.76(5.00)	16.26(5.23)	17.92(5.65)
	全体(n=474)	17.81(5.52)	14.96(5.12)	16.83(5.55)
家規範意識		学生(n=342)	母親(n=178)	全体(n=520)
家族形態	核家族(n=234)	14.91(3.41)	16.73(3.35)	15.54(3.50)
	三世家族(n=286)	15.80(3.54)	17.92(3.17)	16.51(3.55)
	全体(n=520)	15.40(3.51)	17.37(3.30)	16.07(3.56)

()内は標準偏差

作用 ($F_{(1,470)}=0.02, n.s.$) も認められなかった。また、同居否定意識因子では、世代 ($F_{(1,470)}=30.96, p<.01$) と家族形態の主効果が認められた ($F_{(1,470)}=27.45, p<.01$) が、交互作用は認められなかった ($F_{(1,470)}=0.49, n.s.$)。

三世代同居意識に対する世代や家族形態別による分析から、母親よりも学生の方が、また核家族よりも三世代家族の方が、三世代が同居するというに肯定的意識を示していることが認められた。

3. 世代と家族形態による家規範意識の差異

また、世代 (学生・母親) と家族形態 (核家族・三世代家族) によって家規範意識に差異が認められるのかについて分散分析を用いて検討した (表3参照)。この結果では、世代 ($F_{(1,516)}=38.83, p<.01$) と家族形態の主効果 ($F_{(1,516)}=38.83, p<.01$) が認められたが、世代と家族形態の交互作用は認められなかった ($F_{(1,516)}=0.21, n.s.$)。

このことから、学生よりも母親の方が、また核家族よりも三世代家族の方がより高い家規範意識を示していることが認められた。

4. 家族形態と家規範意識の相違による三世代同居意識の差異

さらに、家族形態別と学生と母親の家規範意識の相違といった観点から三世代同居意識に差異が認められるのかについても検討をおこなった。ここでは、学生と母親のペアデータを分析に用いた (表4参照)。

この親子間の家規範意識の相違に関しては、以下のような4群を設定した。学生では、学生の平均家規範意識得点 (14.40) を基準に、平均値以上を家規範意識高群、平均値以下を家規範意識低群という家規範意識群に分類した。同様に母親についても、平均得点 (17.38) を基準に家規範意識高群と家規範意識低群に分けた。すなわち、学生の家規範意識低群と母親の家規範意識低群 (以下、学生低母親低群)、学生の家規範意識高群と母親の家規範意識低群 (以下、学生高母親低群)、学生の家規範意識低群と母親の家規範意識高群 (以下、学生低母親高群)、学生の家規範意識高群と母親の家規範意識高群 (以下、学生高母親高群) という4つの家規範意識群になる。

以上の家族形態 (核家族・三世代家族) と各家規範意識群 (学生低母親低・学生高母親低・学生低母親高・学生高母親高) によって三世代同居意識全体と同居

表4 家族形態別と家規範意識の相違による三世代同居意識

		家規範意識				全 体 (n=148)
		学生低母親低群 (n=39)	学生高母親低群 (n=27)	学生低母親高群 (n=30)	学生高母親高群 (n=52)	
三世代同居意識全体						
家族形態	核家族 (n=58)	49.13(6.76)	51.38(9.50)	49.33(3.16)	52.08(8.67)	50.33(7.45)
	三世代家族 (n=90)	46.13(6.93)	51.31(4.44)	45.67(10.05)	48.62(8.39)	47.78(7.52)
	全 体 (n=148)	48.19(8.80)	52.93(13.53)	57.90(10.05)	54.31(8.65)	53.84(10.21)
		49.31(9.43)	50.43(10.23)	52.52(7.05)	51.18(9.30)	51.04(8.92)
		48.74(7.57)	52.19(11.57)	55.33(9.40)	53.75(8.62)	52.47(9.36)
		47.44(8.09)	50.85(7.85)	50.47(8.51)	50.54(9.07)	49.76(8.52)
同居肯定意識因子						
家族形態	核家族 (n=58)	33.30(5.15)	33.85(10.47)	36.55(6.08)	35.31(4.98)	34.34(5.76)
	三世代家族 (n=90)	33.78(5.60)	35.23(4.44)	32.00(7.48)	35.31(4.90)	34.17(5.63)
	全 体 (n=148)	32.12(7.54)	33.93(10.47)	37.57(6.20)	35.10(5.53)	34.97(7.11)
		34.06(7.57)	34.57(6.58)	35.00(4.60)	35.15(6.28)	34.83(6.14)
		32.82(6.18)	33.89(8.90)	37.27(6.08)	35.11(5.35)	34.72(6.60)
		33.90(6.39)	34.89(5.55)	34.10(5.66)	35.19(5.92)	34.57(5.90)
同居否定意識因子						
家族形態	核家族 (n=58)	15.83(5.00)	17.54(5.87)	12.78(4.74)	16.92(4.87)	15.98(5.24)
	三世代家族 (n=90)	12.35(4.26)	16.08(3.71)	13.67(4.12)	13.31(5.15)	13.60(4.46)
	全 体 (n=148)	16.06(4.82)	19.00(6.11)	20.33(6.51)	19.21(5.72)	18.88(5.90)
		15.25(5.94)	15.86(5.25)	17.52(4.89)	16.03(5.32)	16.21(5.29)
		15.92(4.86)	18.30(5.93)	18.07(6.92)	18.63(5.57)	17.74(5.81)
		13.54(5.15)	15.96(4.48)	16.37(4.94)	15.35(5.36)	15.19(5.13)

()内は標準偏差
上段は学生、下段は母親の平均値

肯定意識因子と同居否定意識因子において差異が認められるのかについて分散分析を用いて検討した。

この結果、学生の三世代同居意識全体では、家族形態 ($F_{(3,140)}=3.08, p<.10$) と各家規範意識群 ($F_{(3,140)}=2.17, p<.10$) の主効果に有意な傾向が認められたが、交互作用は認められなかった ($F_{(3,140)}=1.42, n.s.$)。ここで、チューキーの下位検定で検討した結果 ($p<.05$)、核家族よりも三世代家族の方が、より高い三世代同居意識を示していた。また、学生低母親低群よりも学生低母親高群や学生高母親高群の方が、より高い三世代同居意識を示していた。次に学生の同居肯定意識因子では、家族形態の主効果 ($F_{(1,140)}=0.01, n.s.$) と交互作用 ($F_{(3,140)}=0.15, n.s.$) は認められなかったが、各家規範意識群の主効果には有意な傾向が認められた ($F_{(3,140)}=2.41, p<.10$)。ここで、チューキーの下位検定の結果 ($p<.05$)、学生低母親低群よりも学生低母親高群の方が、より高い同居肯定意識を示していた。さらに、学生の同居否定意識因子では、家族形態の主効果が認められたが ($F_{(1,140)}=8.30, p<.01$)、各家規範意識群の主効果は認められなかった ($F_{(3,140)}=1.39, n.s.$)。また、交互作用にも有意な傾向が認められ ($F_{(3,140)}=2.33, p<.10$)、チューキーの多重比較で検討した結果 ($p<.05$)、学生低母親高群において、三世代家族よりも核家族の方で高い同居否定意識得点が認められた。これらのことから、三世代家族よりも核家族で、また、学生が低く母親が高い家規範示す場合に、三世代同居否定意識が高いことが認められた。

また、母親の三世代同居意識全体では、各家規範意識群の主効果 ($F_{(3,140)}=0.82, n.s.$) と交互作用 ($F_{(3,140)}=0.92, n.s.$) は認められなかったが、家族形態の主効果が認められ ($F_{(3,140)}=3.76, p<.05$)、核家族よりも三世代家族の方が高い三世代同居意識を示していた。次に母親の同居肯定意識因子においては、家族形態と各家規範意識群の主効果および交互作用は認められなかった (家族形態： $F_{(1,140)}=0.33, n.s.$ 、各家規範意識群： $F_{(3,140)}=0.58, n.s.$ 、交互作用： $F_{(3,140)}=0.49, n.s.$)。さらに、母親の同居否定意識因子では、各家規範意識群の主効果 ($F_{(3,140)}=0.85, n.s.$) と交互作用 ($F_{(3,140)}=1.22, n.s.$) は認められなかったが、家族形態の主効

果が認められ ($F_{(1,140)}=6.73, p<.05$)、三世代家族よりも核家族の母親が高い同居否定意識を示していることが認められた。

考 察

本研究では、現代の孫世代にあたる学生と子世代である母親が三世代同居に対してどのような意識を示しているのかということ明らかにするために、学生と母親の三世代同居に対する意識の尺度化をおこなって三世代同居意識尺度を作成した。この結果、家族的な雰囲気や団らんを楽しめるとか自分や家族の急病の時などに心強いといった三世代同居生活のメリットを認知する同居肯定意識、また、生活全般に対する価値観が違ったり世代間のプライバシーが確保できないなどといった同居生活のデメリットを認知する同居否定意識と命名できる二つの因子が存在していることが認められた。

さらに、世代や家族形態によってこの三世代同居意識や家規範意識に差異が認められるのかについて検討した結果、三世代同居意識には世代と家族形態という要因によって以下のような差異が認められた。すなわち、子世代よりも孫世代の方が、また、核家族よりも三世代家族の方が同居に対して高い意識を示していた。三世代の同居肯定意識では世代や家族形態による差異は認められなかったが、同居否定意識では、孫世代よりも子世代、また、三世代家族よりも核家族の方が三世代同居に対して否定的に評価していることが認められた。このことは、三世代同居を経験している場合には、三世代同居のデメリットだけでなくメリットもあることを感じているが、同居を経験しない核家族の場合には三世代同居に対するデメリットに関した想定が出来ないのではないかと考えられる。

旭化成ホームズ株式会社二世帯住宅研究所が実施した調査報告「二世帯同居・この10年」(2007)では、同居の前後に、老親世代と子世代に同居に対する不安や不満についても調査している。この結果、同居後には生活時間やリズムが違う、生活の干渉を受けやすいまた食事の好みなどが違うなどといった項目での得点の低下が認められ、同居することによって同居前に感

じていた不安や不満が減少していることが認められている。このことから、核家族では同居経験がないため三世代同居に対する不安や不満などの否定的な側面が過大評価されやすいことが考えられる。

次に、家規範意識では、孫世代より子世代の方が家に対する規範意識が強く、親から子へと世代が変化するにつれ家規範意識は低下するが、核家族よりも三世代家族において家規範意識は低下しにくいという結果であった。このことより、老親世代、子世代、孫世代が同居する多世代家族の方が、家規範という家族の価値観が継承されやすいのではないかと考えられる。

このことに関して、鈴木（1986）によれば、三世代家族の最大の特徴は、家族内人間関係のネットワークや役割が多く、複雑なことであると指摘している。また、佐野（1988）は、わが国では父方祖母（姑）と子どもの母親（嫁）との同居が多く、嫁姑間に緊張や葛藤が生じやすいとしている。さらに、直井（1984）は、日本の三世代家族の人間関係について家族に関する規範が変化しつつある場合、家族成員間での感情的衝突や緊張などより葛藤が大きくなりやすく、また葛藤の型も多様であると指摘している。

以上のことより、核家族の場合、孫世代よりも子世代において、三世代同居のメリットを認めているものの家族内の人間関係の複雑さから生じる煩わしさや家族の役割を回避したいという思いや家規範意識にはとらわれたくないという思いがあることが推察できる。

さらに、家族形態や親子の家規範意識の相違によってこの三世代同居意識に差異が認められるのかについても検討した。この結果、家族形態と母親の家規範意識高低によって学生の三世代同居意識に差異が認められた。すなわち、学生の家規範意識が低く母親の家規範意識が高い場合には、三世代同居に対して高い肯定的な意識を示すと同時に高い否定的な意識も示すという結果であった。これに対して、母親の場合には、家規範意識よりも家族形態という要因によって同居意識に差異が認められ、核家族よりも三世代家族の方が三世代同居意識が高くまた同居否定意識は低いという結果であった。

これらのことより、孫世代の三世代同居意識は、家族形態と親子の家規範意識の相違によって差異が認め

られたが、子世代の場合には家族形態による差異のみが認められた。このことから、家族形態のあり方や親子の家規範意識の一致度によって、三世代同居意識に差異があると考えられる。すなわち、これまでのような規範に拘束される必然性はなくなっているかと推察できるが、従来の家制度のような家規範意識は現在も存続していることが確認された。

統計数理研究所がおこなった「日本人の国民性調査」によると、あなたにとって一番大切なものという設問で自由記述によって回答を求めた結果、1958～1973年までは、「生命・健康・自分」や「愛情・精神」に分類される回答が1、2位を占めていたが、1983年から「家族」が1位になり、2008年には全体の46%を占め、人々の家族に対する思いは強くなってきていることが示されている。家族形態は多様化したのが、多くの人は「家族」が大切と回答しており、家族の成員間で価値観や規範などの意識が一致していることがそれほど重要な要因ではなくなっているのではないかと考えられる。また、岡堂（2000）が指摘したように、現代の家族において、家族の各構成員の個人化と家族構成員間のつながりが希薄化してきたことにより、三世代家族であっても価値観や意識が世代から世代へ継承されていくことが困難になってきていることも考えられる。

ここで、浜（1993）は祖母と孫の関係が良好な家庭は母と祖母（嫁と姑）がつねによい関係を保っているということを示している。しかしながら、三世代が同居するということに対する意識や価値観の形成に関しては、嫁と姑の関係だけでなく、夫や舅などのその他の家族構成員との関係や友人やマスコミなどの影響も考えられ、一概に母親との相互作用だけに限定して説明することは難しいのではないかと考えられる。三世代家族における良好な人間関係を検討するためには、老親世代、子世代、孫世代間の三者関係、三者間の相互関係についても検討していく必要があると思われる。

今後、家制度の影響を受けている老親世代の意識や価値観が孫世代の意識形成にどのような影響を及ぼすのか、また家族の結びつきに、意識や価値観の他にどのような要因が影響しているのか、さらに、現代のように家族成員間の価値観や規範があいまいな家族の中

で、老親世代は子世代や孫世代とのつながりをどのように求めているのか、などについては今後の検討課題としていきたい。

文 献

旭化成ホームズ株式会社二世帯住宅研究所 (2005). 調査報告書二世帯同居・この10年 二世帯同居・二世帯住宅研究所 pp. 21-31.

旭化成ホームズ株式会社二世帯住宅研究所 (2009). 調査報告書親子同居スタイル・多様化の実態 二世帯同居・二世帯住宅研究所 2010. 1. 10
http://www.asahi-kasei.co.jp/hebel/nisetai/data/2007_style/summary1.html

浜治世 (1993). 三世帯同居家族における祖母-母親-子どもの感情的相互作用に関する実験的研究 感情心理学研究, 1(1), 26-47.

平野俊政 (2009). 核家族化再考 平野敏政 (編) 家族・都市・村落生活の近代化 慶應義塾大学出版会 pp. 3-28.

岩淵千明・水上喜美子 (2004). 大学生の高齢者意識とその構成要因に関する研究(1) 日本心理学会第68回大会論文集, 129-130.

国立社会保障・人口問題研究所 (編) (2009). 日本の世帯の将来推計 (全国推計) (財) 厚生統計協会

毎日新聞人口問題調査会 (編) (2005). 全国家族計画世論調査 毎日新聞人口問題調査会

松村孝雄・張帆・勝野恵美子・山瀬千恵・山本智代 (1992). 大学生の同居別意識とその決定要因-伝統的同居観の再検討- 東海大学紀要 (学生生活部門), 22, 39-55.

水上喜美子 (2008). 家族内の役割逆転が高齢者の心理的側面に及ぼす影響について ジェロントロジー研究報告書, 8, 138-146.

水上喜美子・岩淵千明 (2006). 祖父母との関係が大学生の高齢者意識に及ぼす影響 日本社会心理学会第47回大会論文集, 582-583.

水上喜美子・岩淵千明 (2007). 祖父母との関係が大学生の高齢者意識に及ぼす影響(2)-孫と祖父母の相互作用からの検討- 日本社会心理学会第48回大会論文集, 580-581.

水上喜美子・岩淵千明 (2008). 祖父母との関係が大学生の高齢者意識に及ぼす影響(3)-母親の高齢者意識からの検討- 日本社会心理学会第49回大会論文集, 672-673.

内閣府 (編) (2009). 平成21年版高齢社会白書 佐伯印刷株式会社 pp. 14-24.

直井道子 (1984). 三世帯の人間関係 老年社会科学, 6(1), 105-114.

直井道子 (1993). 高齢者と家族 サイエンス社 pp. 18-37.

直井道子 (2001). 幸福に老いるために 劉草書房 pp. 151-168.

岡堂哲雄 (2000). 家族の変貌と援助の理念-核家族化・少子高齢化への対処を考える- 家族看護学研究, 5(2), 107-111.

佐野志津子 (1988). 農村三世帯家族における世代間の認識の一致・不一致 老年社会科学, 10(1), 42-59.

袖井孝子 (2009). 高齢者は社会的弱者なのか ミネルヴァ書房 pp. 27-28.

鈴木乙史 (1986). 三世帯家族の人間関係 島田一男監修 家族の人間関係(1)総論 プレーン出版 pp. 117-135.

高橋正人 (1989). 老人家族の変容 看護研究, 2(2), 159-167.

統計数理研究所 日本人の国民性調査 2010. 1. 10
<http://www.ism.ac.jp/kokuminsei/index.html>

横山博子・古谷野亘 (1993). 老年期の家族に関する研究-80年代の動向と今後の展望- 家族関係学, (12), 73-39.

山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

※本研究は平成19-21年度文部科学省科学研究費基盤研究(C) 課題番号19530602 (研究代表者 赤澤淳子) の調査結果の一部である。